

「地域の色・自分の色」

～美術館を活用した人材育成と地域振興～

照山 龍治^{1*}木村 典之^{2*}藤井 康子^{3*}

¹公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団

² 大分県教育委員会

³ 大分大学教育学部

大分県立美術館は、大分県大分市にある、平成 27 年 4 月に開館したばかりの美術館です。大分県立美術館は、プリツカー賞受賞経験のある板茂氏によって設計され、平成 28 年には王立英国建築家協会よりRIBA国際優秀賞を受賞したことで、国内では大きな話題となりました。

その大分県立美術館を、オーナーである大分県から委託され、管理運営を行っているのが、私たち、大分県芸術文化スポーツ振興財団です。



©Hiroyuki Hirai

さて、私たちが大分県立美術館を預かるにあたり、大分県と一体となって地域と連携し、芸術文化を活用しながら、人材育成・地域振興に取り組むこととなりました。そこで、大分県立美術館の持つ「教育普及」の機能がこれに有効であると考え、開館 1 年前の平成 26 年に、財団の中で体制を整えました。以降、県内の学校や地域を訪問し、「地域の石や土を使った絵の具づくり」や「地域の石や土と地域の文化財の顔料との関連」「素材と全身でふれ合い、感覚を活性化させるワークショップ」といったアウトリーチを重ね、地に足のついた“大分ならではの”教育普及に仕上げてまいりました。

開始から半年を経てプログラムの充実や、仕組みの整備によって、教育関係者から一定の評価を得られるようになりました。

そこで、県教育委員会、市町村教育委員会と連携し、さらには文部科学省等の指導を受けながら、授業「美術を核とした総合教育」の一環として、学校の授業の中に入っていきこととしました。その取組みは、まずは大分県立美術館から「時間的」にも「位置的」にも最も遠い姫島村という離島で、県教育委員会の「ふるさとの魅力発見・継承推進事業」を取り込んで、当財団と県教育委員会の共同事業として行われることとなりました。

これからご紹介いたしますが、この活動は大きく広がっております。市町村教育委員会、大分県教育委員会、そしてこの取組の教育効果を検証している大分大学の三者と連携しながら、今後も取組みを行っていきたいと考えております。

まず、市町村教育委員会との連携についてご説明いたします。

大分県には過疎化が進んでいる地域が多く、また、そういった地域の大人は、子どもたちに地域の魅力を伝えたいという思いを強く持っています。美術館が近くにない、学校に美術教師がいないため、他教科の先生が美術の授業を行うなど、専門の教育を受けられない子どもたちがいます。



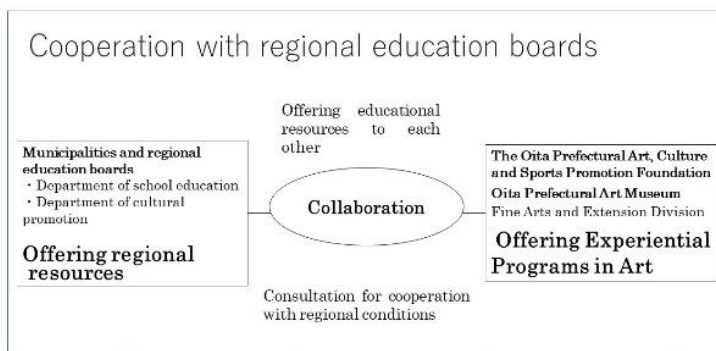
そこで、私たちは市町村教育委員会と連携し、美術を核とした総合教育の出張授業を行うこととしました。美術を核とした総合教育とは、地域の自然・歴史・文化などの資源を活用した美術体験プログラムを実施することにより、子どもの創造力や思考力、探究する力などの総合力を高め、感性や情操を豊かにしていく教育のことです。

具体的には、市町村教育委員会が地域資源を提供し、私たちが美術体験プログラムを提供するという形で、お互いの持つ教育資源を提供します。そして、地域に応じた連携の方法を協議して、その地域の学校で私たちが活動を行うものです。

ベースとなるのは、大分県立美術館の「大分県から絵の具をつくる」というプロジェクトと、大分県教育委員会の「ふるさとの魅力発見・継承推進事業」という二つの取組みです。「地域の色・自分の色」というテーマを掲げ、私たちは地域で、その土地だけの色を1万色つくるという視点、大分県教育委員会は、1人1人が学校の中で自分の個性、つまり色をつくるという視点を持ちながら、活動することとなりました。

先ほど申し上げた姫島をモデルケースとしてご紹介いたします。

大分県の東部に位置する姫島では、平成 25 年から子ども達を対象として、地元の豊かな自然、特に独特な地質地形を楽しみながら学ぶジオ学習が行われていました。そのジオ学習に、「色」という美術的な視点を付加した「姫島まるごとジオ・ミュージアム」を大分県立美術館と姫島村とで共同開催したのが、平成 26 年です。その成果と課題を踏まえ、姫島村では、次年度以降、小学校 1 年生が中学校を卒業する 9 年間を見据えた 10 ヶ年計画で実施することと、予算的にも継続して出張授業を受けることができるよう仕組みを整えることを方針として決定しました。



連携の方法として、私たちは小学校 1 年生から中学 3 年生までの 9 年間の教育プログラムを作成し、教育委員会は学校の教育課程にこの活動を位置づけることとしました。予算は、私たちと教育委員会で半分ずつ持ち合うこととなりました。

また、保護者の理解協力を得て、島民向けの講演会・意見交換会を、子どもたちのプログラム実施日に合わせて共同開催しています。現在、次のジオ・ミュージアムに向けて島民の主体的な材料集めなど、地域への広がりも生まれています。

県内全域への広がりについて述べます。モデルを踏まえて活動を行ったのが、大分県の西端にある日田市です。日田市では、地元出身の画家・宇治山哲平の作品を活用した授業を行いました。教材費や旅費は私たちが負担し、代わりに日田市が所蔵している宇治山作品の貸し出し手続きや搬送を、日田市教育委員会にお願いしました。

さらに、南部にある佐伯市宇目町では、先日エコパークに認定された祖母・傾・大崩山系地域の自然を活用して、地域の色を体感する取組みを行っています。

このような取組みは県内各地に広がっており、現在までに 30 校以上の学校で行われています。美術を核とした総合教育の充実により、美術文化に親しむ心、子どもたちの中に郷土愛や、地域の活力が向上しています。

次に、大分県教育委員会との連携についてご説明します。

姫島での取組み、そして、各地域での実践などをふまえ、美術館を活用した学校の取組みを点から面へと広げるため、教員の研修にも入っていくこととしました。

先ほど申し上げたとおり、大分県には残念ながら、本物の美術や美術教育に触れることのできない子供が多くいます。また、先生たちの中には、美術や図工の指導に苦手意識を持つ方も多くいます。

そこで、大分県教育委員会は美術や図工の指導力の向上、私たちは子供たちが芸術に直接触れる機会の提供を行うため、平成 27 年度より、両者の連携のもと、ステップアップ研修を行うこととなりました。対象は、新規採用 2 年目の県内小学校教諭全員で、教科の指導法及び美術館を活用した学習指導に係る講義・演習を通して、教育活動の基盤となる教育的実践力の基礎の確立を図ることが目的です。

先生方はここで、実際に美術館の教育普及プログラムを体験します。「美術館での研修を学校での指導に生かせる」と答えた教員が 95%にのぼるなど、この体験を通して、先生方の中で美術や美術館、鑑賞への認識が変わりつつあるようです。



教育実践の効果検証についてご説明いたします。

これまで説明しました取組みの教育効果を検証するため、私たちは大分大学の教育学部と連携し「幼小期における地域の色をテーマとした教科融合型学習の開発～アートとサイエンスの探究的な学び～」という研究を行っています。そして、この実践研究を進め、その成果を学校教育に還元することで、小学校教育の特に情操教育の充実を目指しています。

そのため、美術館の教育資源を活用した授業に対して、授業観察、授業記録分析や、記述式の調査などを大分大学が行い、どういう能力が働いているか、また、どういう力に繋がるかを研究しているところです。

美術館プログラムを活用した学校での教育実践、美術館プログラムを活用した教員研修、大学と連携した教育効果の検証を円滑に実施するための仕組みも整えてきました。「『地域の色・自分の色』実行委員会」という組織を立ち上げ、有識者による「関係機関連携推進協議会」を開催しています。組織の役員には、元ユネスコ日本政府代表部特命全権大使で、当財団理事長の佐藤貞一氏をはじめ、県教育委員会、関係市町村、市町村教育委員会、実践校の校長や、実践校を所管する教育事務所長等が所属しています。日常的には学校現場の指導や教育委員会との調整を行い、年 2 回全員が集まって、実践交流や研究協議を行っています。教育効果についても、様々な角度から示唆に富んだ意見をいただいています。



最後になりますが、「子どもを取り巻く教育環境としての学校・保護者・地域」という視点についてです。姫島の実践でも少しふれましたが、美術館の出張授業では、取組を地域や保護者に公開したり、説明会(講演会)を行ったりしています。そして、このような機会をとらえ、学校や地域・保護者の方と、意見交換するようになっています。「子どもが夢中になって、生き生きと活動する姿をみる事ができて、学校としてもよかったと思う」「どうりで近頃、(子どもが)色の話を家ですると思ったら、こういう取組みをされていたのですね」「知識として知っていることと、実際にやってみることは違う。子どもたちが今日、色作りを体験できたことは、一生忘れられない財産になったと思う」などです。「地域の色・自分の色という視点を持つことが、ふるさとへ思いを深める」という感想を、多くの方からいただいています。このような受け止め方をしている保護者と一緒に生活していれば、日常の中に美しいものをみつける子どもたちの視点や感性も育ってくるのではないのでしょうか。また、実際の授業の中で、あるいは、日常の中で、子ども達は「きれい!」「すごい!」という言葉が自然と発しているそうです。子どもたちの言葉を、周りの大人がどう拾い上げていくか、ということも重要だと考えています。教育実践の対象は、子どもたちであり、場所は学校が中心ですが、学校で行っていることを、保護者や地域がどう受け止めているか、先生・保護者・地域などの、大人がどう変わったか、という視点も大切にしながら今後も取り組んでいきたいと考えています。



先ほども申し上げました通り、この取組みは県内各地に大きくひろがっております。

これからも、大分県内の人材育成・地域振興のため、市町村教育委員会、大分県教育委員会、大分大学と連携を図りながら、取組みを続け、拡大し、大分の未来を担う子どもたちの教育に繋がっていきたいと思っております。

